

新型コロナウイルス感染症の影響で、聞法の機会が大きく失われてしまいました。このような時にすこしでも皆様に仏法に触れていただけるよう、紙面1枚程度の短い法話を連載いたします。
小松教務所

真宗門徒の「当たり前」の生活を

● 当たり前を失って

新型コロナウイルス禍によって「これまで当たり前だと思っていた日常生活は、決して当たり前ではなかった」と感じられている方は多いのではと思います。では、真宗門徒にとっての当たりの生活とは何でしょうか。私たちが相続してきた真宗門徒の生活は、朝夕のお勤めをし「南無阿弥陀仏」と念仏を称えていくことです。その真宗門徒の当たりの生活は、今、皆さんの生活のなかでどうなっていますか？

● お念仏の歴史を感じて

皆さんは、お内仏でご両親や爺ちゃん婆ちゃんの「南無阿弥陀仏」の声を聞いたり、お念仏を称えたりしたことがあると思います。私はデイサービスの仕事をしていますが、お年寄りに「なんで念仏するんですか」と尋ねたことがあります。



一人の方が「うら、なんで、なんて考えたこともないがや。ねんねの時に爺ちゃんや婆ちゃんが朝から晩まで、なんまんだぶつなんまんだぶつ、とお念仏をもうしておいでたがや。うらその姿をみて育つうちに、せんならんもんながやといただいできたがや」と言われました。この言葉に表れているように、うらの爺ちゃんも婆ちゃんも同じようにお念仏の姿に出遇ってきたということは間違いのないことだと思います。それは、私に先立って数限りない人のお念仏があったということですし、お念仏とともに人生を歩まれてきた多くの方がおられたということです。このことは、お念仏の歴史とともに人間の歴史があるということの意味しているのではないのでしょうか。

● 南無阿弥陀仏という仏様

「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えるところには、その前に「聞いた」ということがあり、「聞いた」というところ



には、その前に「称えた」ということがあります。そうやってお念仏の歴史をたずねていくと、日本、中国、インドの念仏者の歴史を経てお釈迦様までたどり着きます。さらに、お釈迦様からさかのぼれば、親鸞聖人は『正信偈』の初めに「法蔵菩薩因位時」と示されて、法蔵菩薩が本願を起こされたことが「南無阿弥陀仏」の原点であるといただかれています。さらに『正信偈』には続いて、法蔵菩薩が本願を起こされた理由を「とけんしよぶじょうどいん 観見諸仏浄土因 こくどにんでんしぜんまく 国土人天之善悪」と示されて、法蔵菩薩が人天の善悪を深く見つめられたからであるといただかれています。

善悪とは苦楽ということ。つまり「南無阿弥陀仏」の根源には苦楽の現実、人間の苦悩があるということです。その人間の苦悩が法蔵菩薩に本願を起こさせたのです。本願には「もし生まれずは正覚を取らじ」と、苦悩する人間が存在する限り仏とならないと、法蔵菩薩は誓われています。

「南無阿弥陀仏」とは、人間の苦悩を受け止めて、苦しみの本を抜くはたらきにまでなられた、仏様のおはたらきそのものなのです。



● 出遇いのなかに

デイサービスでのお年寄り同士の会話のなかで「おうことにはおわんならんがや」という言葉を聞きます。この言葉は「出遇わなければならないことには出遇っていかなければならない、これが生きるということなのだ」という教えだろうと思います。私たちは思いを超えたいろんな出遇いを生きています。けれども、その出遇いを苦楽と感じ、その苦楽にとらわれて苦しんでいるのが私たちの現実ではないのでしょうか。

お年寄りの言葉は、お念仏のなかに人生の真実をいただかれていった人々によって伝えられてきた、生きた言葉であり、ここに「南無阿弥陀仏」がはたらいてきたことの証があるのです。

当たり前と思っていた生活が当たり前でなくなった今だからこそ、私たちは真宗門徒にとっての当たりの生活をたずねなおし、「南無阿弥陀仏」に出遇っていく大切な時をいただいているといえるのではないのでしょうか。



(小松教区寶海寺 柿原 勸)